

2013/ 7

すいた 商工会議所 ニュース

THE NEWS OF SUITA CHAMBER OF COMMERCE & INDUSTRY

URL <http://www.suita.cci.or.jp/>

会議所でほっと笑顔に

吹田商工会議所

検索

吹田商工会議所報

平成25年7月10日発行（毎月1回10日発行）第33巻第4号 通巻第385号 平成5年1月21日第三種郵便物認可



〈本社ビル全景〉



〈液晶パネル市場には欠かせない偏光板貼付機〉

“Something New”

それは企業としてのアイデンティティを表わす
永遠のメッセージであり、テーマです。

淀川ヒューテック株式会社

取締役会長 小川 勉 氏

本年7月8日に創立50周年を迎えた淀川ヒューテック株式会社は、小川勉 会長がフッ素樹脂の成型・加工を主業務として、当初7名で創業されました。

現在、グループ会社11社を含めて、従業員700名、売上高450億円に規模を拡大されました。特に、液晶パネルの両面に偏光フィルムを貼り付ける偏光板貼り付け装置では、約70%の世界シェアを誇っておられます（2011/11/22付 日経産業新聞）。今回は、同社の創業者である小川勉 会長にお話を伺いました。



—— 今日のような業容にまで、貴社は成長を遂げられましたか、その要因は何でしょうか。

それは「Something New」の企業風土にあると思います。社員全員が、何か新しいものを生み出そうと今日まで努力を続けた結果です。そういう風土が作れたことが、一番大きいのではないのでしょうか。

組織風土は経営が厳しいときこそ、その真価が問われてくると思います。

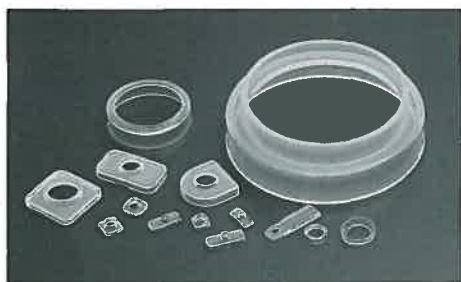
こうした取組みの中から、役員の中で、ものづくりで黄綬褒章を受章したものが2名出ています。

—— 本年7月8日に創立50周年を迎えられましたが、創業の経緯を教えてください。

私が創業したのは29歳の時でした。

大学を卒業後は、商社に就職し営業畑を歩んでいました。その頃私が販売していたのは、「シリコン」と「フッ素樹脂」の2つの製品でした。特に私は酸やアルカリ、そして熱にも強い「フッ素樹脂」に興味を持ち、販売することに大きなやりがいを感じていました。フッ素樹脂は、現在は様々な工業製品や商品に利用されていますが、当時は稀少な合成樹脂で、銀と同じ値段で取引されるほど高価なものでした。またその特性上、成型加工を行うことが大変難しい素材でもありました。

しかし私は、難しいからこそ、その分付加価値を高めることができると確信し、このすばらしい素材を活かすためには、自分で実際に作ってみるべきだと考え、創業を決意しました。



〈絶縁用ガスケット〉
リチウムイオン電池内部の電解液漏出や過電を防ぐ

—— 創業後についてはいかがでしたでしょうか。

私を含めて当初は7人からのスタートでした。フッ素樹脂の可能性は十分確信していましたが、独自の製品開発は大変難しく、創業メンバーで試行錯誤する日々が長く続きました。自分たちの思いと現実の違い、投資や努力を続けてもいつ芽が出るのか非常に不安に感じたものです。しかしながら、あきらめずに努力を続けていると、周りに応援してくれる人もだんだん増えてきて、雲が晴れるように徐々に先行きが見えてきました。創業初年度の売上は80万円で赤字でしたが、おかげさまでそれ以降は現在に至るまで黒字を継続しています。

—— 現在は、幅広い事業分野を持つグループに拡大されています。

当初の主力分野であったフッ素樹脂事業は、現在は全体の売上の4割ほどです。売上の主力は、半導体事業と液晶事業に移行しています。

多くの事業分野を持つに至りましたが、いたずらに他分野へ進出しようと意識していたわけではありません。常に現在の事業を重要視するなかで、顧客より、関連するさまざまな要望が出てきました。そうした顧客の声を受け止め、それに応えるために新たな技術や視野を広げていきました。

この20年程の間に、M&Aを6社行いましたが、これも同じような方針で実行してきました。お付き合いのある金融機関や証券会社からさまざまな企業をご紹介いただきますが、どんなに良い条件であっても、現在の事業分野と関連性のない企業は対象にはしませんでした。私たちの専門分野であれば、その会社の価値がわかるからです。



〈本社ビルエントランス〉
エントランス横には流れる植栽を設置し、安らぎを与えています。

—— 貴社では従業員満足についてどのように取り組んでおられますか。

私は、社員のやりがい、満足度をベースに経営しています。

創業のときの「みんなでやりたいことを実現しよう」の精神でやっています。

入社してよかったと思ってもらえる社員を一人でも増やすことが、今後も会社の発展につながると確信しております。

—— 貴社の今後についてお聞かせ下さい。

日本国内は、大手電機メーカーを始めとして、業界を取り巻く環境は年々厳しくなり、生き残るためにはグローバルな経営が必要です。

当社も海外における売上割合が年々高まっています。現在、韓国、中国に工場がありますが、来春、中国に二つ目の工場を建設予定です。

中国でも人を大切にする日本的経営をベースにしてゆきたいと思っています。

—— 今後も、ますますのご発展をご期待しております。